

## なげける魂のもとに（樺山君の靈に捧ぐ）

著者	泯
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 6
ページ	1 0 0 - 1 0 1
発行年	1914-12-25
その他の言語のタイトル	なげける魂のもとに（樺山君の靈に捧ぐ）
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6417">http://hdl.handle.net/2298/6417</a>

只白き一直線に蕎麥の畑見ゆる程にも汽車走るかも  
汽車動き電柱に書かれし年號の白きペンキに淋しさの湧く  
貧弱な輕便汽車の煤ぼけし窓より見たる十二月の月

### ○旅館にて

暖かき阿蘇のいでゆに浸りつゝ淋しく聞けり百千鳥の啼く聲  
爪弾の音のひまゝに夜鳥の啼きたり旅の淡き悲しみ  
はたゞと旅館の門に淋しくも紅提灯の揺れるたるかも  
ところどころ紅提灯の灯の見ゆる寂しき村に我は今つく  
湯あがりの身に冷やかに風吹きてネルの縋絆の肌ざはりよき  
川端のホールに燈火ともる頃月の出潮のはの赤きころ  
淋しさに追はれ追はれて來しなれど我こし方を見返る勿れ

なげける魂のところに

——樺山君の靈に捧ぐ——

泯

白壁は永劫に空しくのこりしが君がいさをの壁画ものせむ  
きみ逝く日大あめつちを哭かさんす理想もかなしきみ天折す  
秋雨はかなしきものよなき友の柩ぬらして何をうたへる

兄きみよ秋雨けふる河内路のあしたながめて何をなげける  
きみ葬る日千人の儀伐兵はせむもなし白川べりになくはたが兒ぞ  
運命と云ふたわけ者若人の燃ゆるけむりをなにとながむる  
むらさきの球麻の夕ざり綬となりてきみが柩をうるはしくまけ  
とぼとぼとひとりの道を行くべかるさびしき吾れを秋の風ふく  
きみがふす永劫の寢床の冷めたくばわれの涙をそゝがせしめよ  
われはありきみは何ゆゑあらざるか怪しくことをまたも思へる  
いざさらばされども魂たまのやすむべきところなくんばわが胸にこよ

